
幸せ中毒

たこき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ中毒

【Nコード】

N2021W

【作者名】

たこき

【あらすじ】

様々な自殺方法を試して死のうとする男と、それを手伝う女のお話。

内容は全然重くありません。
短いので、読んでやってください。

くプロローグ

「なにやってんだ!! 逃げろ!!」

気がつくと、彼は私の隣にはいなかった。

「死にたいのか!? バカ野郎!!」

彼の隣には、ゴリラがいた。

「死にたい……? ふふ、愚問だな。もちろん、死ぬつもりだ」

彼は不適に笑うと、ゴリラに向かって殴りかかった。

第一話

「やあ、よく来てくれたね。ははは、また死ねなかったよ。真に残念だ」

骨折三箇所、全身打撲、全治一ヶ月。ゴリラと喧嘩した代償がこれだ。当然、勝敗はゴリラの圧勝だった。

「そんなに死にたいのなら、そこから飛び降りればいいじゃん」

四階の病室の窓から落ちれば、直ぐに死ねるだろう。

「はぁ……。君は全然わかっていないんだね。飛び降り自殺なん

て、つまらんだろう？ 俺はもつと面白い死に方をしたいんだよ。それに、病院で飛び降り自殺をしても、直ぐに治療されてしまつて死ねないじゃないか！」

何故か理不尽に怒り出す彼。名前はまだ聞いていない。というか、教えてくれない。何度聞いても「今すばらしい戒名を考えている最中だ。暫し待たれよ」と、梅干を食べたときの様な顔ではぐらかされる。

「私、怒られるのキライなんだよね。ほら、私ゆとり世代だから、褒められて伸びるタイプなんだよ。だから、お前の理不尽な怒りに付き合うつもりはない。帰る」

私は見舞いに持つてきたヒヨコ饅頭を彼に放り投げた。

「痛い！ 右腕折れてるんだぞ！！ ちょっとはいたわってくれても……ヒヨコ饅頭を喉に詰まらせて自殺……面白いじゃないかあ！」

彼はそう言うと、ヒヨコ饅頭を次々と喉に放り入れた。私は彼のそんな行動を一切無視して、荷物をまとめた。今日は見たいドラマがあるのだ。こんな自殺志願者に付き合っている暇はない。

「それじゃ。死ねるといいね」

私は荷物を持って病室を出ようとした。そのとき、ヒヨコ饅頭に溺れて窒息しそうになっている彼が、言葉を漏らした。

「ゴホオウ！ ゲホオウ！ ……ま、まで、最後に俺の戒名を聞いてくれ……」

彼はそう言うと、ヒヨコの破片を白いシートの上にばら撒きながら、自らの戒名を発表した。

「モロコシ……で、よろ……しく………」

彼はヒヨコの力を甘く見ていたようだ。ヒヨコ饅頭はパサパサで、水分を奪うということを見逃していたのだ！

彼の咽頭にたまったヒヨコ達は、咽頭のわずかな水分を根こそぎ吸い取り、見事に彼の意識を奪うことに成功した。

「はぁー……」

私は静かにため息をつき、ナースコールを押してから帰路に着いた。

第二章

モロコシと出会ったのは、一年前のことだ。

一年前、カメラマンとして駆け出しだった私は、自分の理想とかけ離れた現実に失望していた。私が悶々と悩みながら街中を歩いていると、全裸のモロコシに話しかけられた。

「やあ、君良いカメラを持っているね。もしよかったら、写真を撮ってもらえないかね？」

……可憐な乙女であれば、ここで悲鳴の一つや二つ上げるのが普通なのであろう。でも、私は物怖じしない女なの。

「いいよ。それでも私、プロだから。お金とるからね。一枚一万円。

OK？」

全裸のモロコシは、ニヤリと笑いながらグッドサインをした。

「今はないけど、あとでお金下ろしてくるから。頼むよ」

金を払われたら、プロとして断るわけにはいかない。私はカメラを手に取り、写真を撮り始めた。

「パシャ！ パシャパシャ！」

私は夢中で写真を撮った。男の裸体に興味はない。それどころか、普通の人と同じように、嫌悪感を持っている。いまにもゲロ吐きそうだった。それでも、私は真剣に被写体の裸男と向き合った。自分の撮りたいものだけとつてもダメなんだ。これはずっと考えていたこと。その考えが今、ハッキリとした。希望に満ちていた過去の自分とおさらばする決心が付いた。

「パシャ！ パシャ！ いいぞ、いいぞ！ そのきたねえモノをもっと見せてみる！」

遠くで「キャー！」という悲鳴が聞こえた気がしたが、集中していた私は無視して写真を撮り続けた。

「こら！ なにやってんだお前！」

気がつくと、警察がやってきた。そして、全裸のモロコシを取り押さえた。当然、その瞬間もカメラにおさえた。瞬間瞬間を見逃さずに、カメラにおさめる。それがプロ。

「お前もだ！ こっちに来い！！」

かくして、私と全裸のモロコシは警察に捕まり、猥褻行為の罰を受けた。

その日以来、何故かモロコシとは縁があり、一緒に行動することが多かった。

ちなみに、当時何故全裸で町を歩いていたのかモロコシに聞いたことがある。

「恥ずかしさで、死にたかった」

……だそうだ。

第三章

今日もまた、モロコシに呼び出された。

「今日はどうやって自殺するの？ 私も暇じゃないから、死ぬなら速くしてちょうだい」

私はいつもの様に、冷やかな態度でモロコシに話しかけた。

「今日は、自殺が目的じゃないんだ。自殺するに当たって、遺書を書いた。それを、君に預かっていて欲しいんだ」

今日のモロコシは、少しいつもと雰囲気違った。いつもは基本的に真剣なのだが、どこか不真面目さが滲み出ている人だった。でも、今日は口調も重く、顔つきも精悍で、少しドキッとした。

「これだ。もし、うまく自殺できたら、君に読んで欲しい」

モロコシはそう言うのと、私に茶封筒を差し出した。そのときの、モロコシの顔、怖かった。モロコシは、今度こそ本気で死ぬ気だ。そう思えてならなかった。

「今回は、本気なの？」

いつもモロコシが自殺に挑戦する前に聞く言葉。モロコシは決まって「もちろん！ 私はいつだって本気さ」と言っていた。でも、今回だけは違った。無言で、頷くだけだった。

「そつか……。じゃあさ、今度こそ教えてよ。あなたが自殺したい理由」

今まで、何十回とモロコシの自殺に付き合ってきた。でも、一度たりとも、何故死にたいのかという理由を聞いたことがなかった。死人に口なし。聞くなら、まだ生きている今がいいだろう。

「……そうだな。君には本当に世話になった。君だけには、話しておこう」

そう言つと、モロコシは静かに語り始めた。

第四章

「私の両親は、強盗に殺されたんだ」

初めて聞かされた事実。

「ちょうど小学6年生の頃だった。当時、私は強盗犯のことを酷くうらんだ。なんで私の父を殺したんだ！　なんで私の母を殺したんだ！　他にも人はいっぱい溢れているのに、何で『私の』なんだ！　ってね」

モロコシの声は、微かに震えていた。

「私は強盗犯によつて、勝手に人生を終わらされた両親を不憫に思った。そして、他人に死刑宣告された強盗犯にも、同じように同情した。死に方くらい、自分で決めさせろや！！　そう、思ったのだよ……」

モロコシは遠くを見て、うなだれていた。

「それからというもの、いろんな自殺方法を考えたよ。オーソドックスに首をつろうとか、腹いっぱい食べて胃を破裂させて死のうとか、乳母車にはねられて死のうとか……。そんな風にいろいろ考えるのが、いつの間にか楽しくなってね。今では自殺が私のライフワークになっているのだよ。ははは……」

自殺がライフワークって……。なんじゃそりゃ。ちくしょう、少し面白いじゃないか。

「パシャ！」

私は、無邪気に笑うモロコシの顔を撮った。

「葬式の写真は、それにしてもらおうかな」

これが、モロコシの最後の言葉だった。

第五章

3日後、私のもとに悲報が届いた。私は直ぐに病院に向かった。

「今朝、海辺で発見されたそうです。発見されたときには、すでに意識がなかったそうです」

看護師が淡々と事実を語ってくれた。私はそれを、淡々と受け止めた。看護師の話の聞いても、私の感情は起伏しなかった。この状況は前々から想像していたことだし、覚悟もしていたから。つらくもなかったし、悲しくもなかった。

「それじゃ、失礼します」

看護師が退室した病室には、私と、冷たいモロコシだけ。やけに静かで、やけにひんやりとした触感。ふと、モロコシの手が目についた。何故か、その手を握りたいと思った。握った。冷たかった。急に、心に穴が開いた。深く、大きな穴だ。私の心にあつた、モロコシの存在が占めていた空間が、全て抜け落ちたのだ。その瞬間、涙が出てきた。ぼったんぼったんと雫が垂れた。このとき、私は気付いてしまったのだ。モロコシが、私にとって、とても、とても大切な人であったことに。そして、もう、取り返しが付かないことに……。私は、いつの日にか撮ったモロコシの写真を見た。そこに写るモロコシは、どれも不細工だった。でも、私の心のフアインダー越しに見るモロコシは、いつも魅力的で、私の心を掴んで離さなかった。冷たいモロコシの顔と、写真のモロコシの顔を見比べてみる。どちらも、不細工だ。そして、どちらも、魅力的だ。でも、私は、

自殺を遂げて安堵したモロコシの顔よりも、自殺を楽しんでいたモロコシの顔の方が……好きだ、こんちくしょう……………。

最終章

病室を後にした私は、遺書のことを思い出した。病室前で立ち止まり、遺書を開いた。そこには、こう書いてあった。

『いろいろ考えたのだが、やっぱり『モロコシ』という戒名は変だと思う。だから、新しい戒名を考えた。ズバリ『ロコモコ』だ！
どうだろうか？ おいしそうな、活かした戒名であろう。これから私のことを『ロコモコ』と呼ぶがよい。

p.s. 今度はおっぱいに口と鼻を塞がれた状態で、窒息死をしようと思うのだが、どうだろうか？ 君はAカップだから、手伝えないだろうけどね。ははは……………』

私は、自分の目を疑った。これが、遺書？ ってかAカップを馬鹿にしたな！！ こんちくしょう！！ 私は怒りをあらわにし、モロコシ改めロコモコがいる病室の扉を掴んだ。最後に一発ぶん殴ってやる！！ そう思いながら、私は強く病室の扉を開けた。

「やあ、よく来てくれたね。ははは、また死ねなかったよ。真に残念だ」

いつものように、「ははは」と笑うロコモコ。私は思いつきり、ロコモコの顔をぶん殴った。「はうう！」と気味の悪い声と共に、ロコモコはベッドから転げ落ちて、気を失った。私はナースコールを押して、直ぐに病室から飛び出した。

「よかった。泣き顔、見られなくて」

この日、私は人生初のうれし泣きを体験した。

く了く

くエピソードく

「君の涙で溺れ死にたいのだが」

これが、ロコモコ流のプロポーズだと知ったのは、このセリフを聞いてから1カ月後のことだった。その事実を知った私は、こう返事をした。

「あんたの死因は『幸せ中毒』になるけど、それでもいい？」

（後書き）

短編小説を書きたいなあー、とふと思い、書きました。

実はこれ、長編にしようと暖めていたのものなのですが、短編用に無理やり終わらせたのです。

なので、終わりがたが自分的には少し不満です。

本当はもっとじっくり考えたかったのですが、とにかく短編を書きたかったのです！

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2021w/>

幸せ中毒

2011年10月9日08時50分発行